

運動処方に関する研究

—ま と め—

岡田敏夫

富山医科薬科大学小児科

運動処方に関する研究班は初年度、2年度にひきつづき、以下の点につき検討を行った。

小児期腎疾患患児についてその疾患別・病態別に運動負荷による影響について検討した。小児期慢性腎疾患患児において運動が尿酸排泄に及ぼす影響につき重症度別に検討した結果、回復期腎炎群では活動日に尿酸排泄が低下する症例が多いのに対して、活動期腎炎群や腎不全群では、活動日に単位ネフロン当たりの尿酸排泄量の増加するものが多かったことより、活動性腎炎児においては尿酸代謝の面より積極的な運動を避ける方針で対処すべきと考えられる。

またI g A腎症の病態の把握には、急性の強い運動負荷試験が有効であると考えられた。

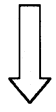
定期的な縄跳び負荷を行った成績では臨床的寛解例、組織学的軽症例では負荷によるC_{cr}、アルブミンの変動がより少ない傾向があり、これらの結果負荷前後の変動パターンを測定することは、日常生活管理のひとつの指標となると述べている。

また各種腎疾患児及び健常児に運動負荷試験を3日間行った結果、健常児群ではC_{cr}に著変がみられなかったが腎炎群ではC_{cr}の有意の低下がみられたことより、蓄積した運動による影響、ならびに回復力の遅延がこの原因と考えられたとの成績も報告された。

小児の日常生活運動量の増加が腎糸球体血行動態に及ぼす影響についてみた成績では、小児では成人のそ

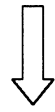
れと異なっており少なくとも日常生活運動量増加がC_{cr}低下をきたさない現象が存在するとも考えられた。また長期間経過している腎疾患患児において、日常生活と安静による尿蛋白分析像について検討した結果、尿蛋白分析像が腎機能予備能を推測する一つの指標となりうるとの成績も報告された。

以上より今後小児腎疾患の進行、成人期へのCarry Overの問題などを検討する必要がある単純に日常生活運動量を増加させる処方が良いかどうか決定するにはなお十分な調査研究継続が必要と思われた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



運動処方に関する研究

- まとめ -

岡田敏夫

富山医科薬科大学小児科

運動処方に関する研究班は初年度、2年度にひきつづき、以下の点につき検討を行った。小児期腎疾患患児についてその疾患別・病態別に運動負荷による影響について検討した。小児期慢性腎疾患患児において運動が尿酸排泄に及ぼす影響につき重症度別に検討した結果、回復期腎炎群では活動日に尿酸排泄が低下する症例が多いのに対して、活動期腎炎群や腎不全群では、活動日に単位ネフロン当たりの尿酸排泄量の増加するものが多かったことより、活動性腎炎患児においては尿酸代謝の面より積極的な運動を避ける方針で対処すべきと考えられる。

また IgA 腎症の病態の把握には、急性の強い運動負荷試験が有効であると考えられた。定期的な縄跳び負荷を行った成績では臨床的寛解例、組織学的軽症例では負荷による Ccr、アルブミンの変動がより少ない傾向があり、これらの結果負荷前後の変動パターンを測定することは、日常生活管理のひとつの指標となると述べている。

また各種腎疾患患児及び健常児に運動負荷試験を3日間行った結果、健常児群では Ccr に著変がみられなかったが腎炎群では Ccr の有意の低下がみられたことより、蓄積した運動による影響、ならびに回復力の遅延がこの原因と考えられたとの成績も報告された。

小児の日常生活運動量の増加が腎系球体血行動態に及ぼす影響についてみた成績では、小児では成人のそれと異なっており少なくとも日常生活運動量増加が Ccr 低下をきたさない現象が存在するとも考えられた。また長期間経過している腎疾患患児において、日常生活と安静による尿蛋白分析像について検討した結果、尿蛋白分析像が腎機能予備能を推測する一つの指標となりうるとの成績も報告された。

以上より今後小児腎疾患の進行、成人期への Carry Over の問題などを検討する必要がある。単純に日常生活運動量を増加させる処方が良いかどうか決定するにはなお十分な調査研究継続が必要と思われた。